倉公淳于意　その二　症例の二

家本誠一

前回に引き続き症例の検討を行う。

一　疽（症例一）

この病名は、『素問』では、至真要大論中に、少陰の復の症状として、瘡、瘍、癰などと共に記されている。『霊枢』では、玉版第六十、癰疽第八十一に癰疽と併称されている。いずれも皮膚体表部の化膿性疾患であるが、両者の違いは、癰が体表に留まるのに対して、疽は深部に侵入して五蔵をも侵すことだという。

また、『素問』腹中論第四十には胃脘内癰の語がある。倉公例の疽は、この内癰である。

脈によって、病は肝に在り、飲酒女色により之を得、と診断している。飲酒して肝を傷り、やがて疽を生ずるわけであるが、その前に、中熱して膿未だ発せず、という時期がある。

中熱とは、『霊枢』師伝第二十九に中熱消癉と併称するように、糖尿病様の口渇、多飲、多食、多尿を呈する病である。『素問』診要経終論第十六に、厥陰の終る者は中熱し溢乾き喜（しばしば）溺し心煩す、とある。すなわち肝の病の一症状である。

飲酒傷肝により、中熱して糖尿病様症状を起こすも膿未だ発せず、そのうち感染を受けて膿を形成し、吐膿して終る。これが本症の経過である。病名は肝膿癰であろう。

二　熱病気（症例四）

病因は、流水に浴して、体がひどく冷え、そのために熱（感染）を起こしたことにある。

発熱自汗はあるが、予後佳良としている。理由は、脈を診するに、陰陽交せず、（気が）陰に并しているからだという。

陰陽交する者は死す（『素問』評熱論篇第三十三）。陰陽交とは、熱病で、発汗（陽虚あるいは陰実）したが緩解せず、さらに発熱して脈躁疾（陽実）を呈する、というよう

に、陰陽が分別しない状態をいう。

陰に并するとは、気が并するのであろう。気が陰に并するときは（陰気が倍増して）陰が実する。陰が実するときは、身寒し汗出て身常に清ゆ（『素問』陰陽応象大論）。

いま、陰に并するがゆえに汗出て身清え、陰陽交わらざるがゆえに、さらなる発熱脈躁疾はない。ゆえに予後佳良ということになる。

次に、腎気濁り、水気あり、治を失して寒熱となる、とある。この寒熱とは何か、

寒熱には、少なくとも二つの意味がある。一つは弛張熱、悪寒発熱の繰り返しを示す熱病である。いま一つは、冷えやのぼせのような血管運動神経症である。本例の場合は弛張熱を呈する熱病である。

流水に浴して冷え、熱を起こして腎に異常がある。考えられるのは、腎盂腎炎のような病であろう。この病はそうとう重い病であるが、倉公の治療で治癒しているのだからわりに軽い症例だったのであろう。

三　肺消癉＋寒熱（症例六）

消とは、溢乾き多飲多尿する病である。癉とは、消耗性の疾患である。したがって消癉とは糖尿病様の症状を呈する病気と考えられる。肺消の記載は『素問』気厥論第三十七にある。心が寒を肺に移すときは肺消す。肺消の者は飲むこと一たびすれば溲二たびす。肺の消耗性の病で多尿を起こすもののようである。

倉公例では、発熱（寒熱）があり、羸瘦憔悴（尸奪、形弊）し、かつ末期には狂（妄りに起行し狂走す・陽明胃経の陽盛熱実、『素問』陽明脈解第三十）を発す。

倉公は脈によって肺気の熱と診断する。慢性の肺の化膿性疾患が考えられるが、肺結核による消耗と結核性脳炎による精神障害の方が近いように思う。

病因として盛怒（張り切って）して以って接内（セックス）したことを挙げているのも参考になる。

本例は前医によって誤治を重ね、病を重くしているが、半夏丸で下痢（泄注）し腹中虚を起こしているのは腸結核を思わせる。

四　内寒（症例十八）

本例は、腰背痛と寒熱を病む女性である。衆医皆寒熱となす。倉公は内寒（生殖器の冷え）で月事下らず、と診断して座薬を用いて治癒せしめた。

寒熱に二つの場合があることは先に述べたごとくである。患者の寒熱は神経性の冷えとのぼせである。衆医の寒熱は感染性の弛張熱である。倉公は脈を診して、腎脈が渋って属せざるより月事下らざるを知り、肝脈が弦にして左口に出ずることより、男子を欲して得ざりしことを知る。腎肝ともに生殖器に関係するが、肝は外陰に、腎は内陰に関係が深いように考える。

感染症としての寒熱は重症の病である。衆医がよく他病を誤診して寒熱としているが、それだけ関心が強かったからだと思う。

（神奈川県横浜市）

『傷寒論文字攷続補』について

荒木　ひろし

『傷寒論文字攷続補』は『傷寒論文字攷』（嘉永四年刊）と『続編』（嘉永六年刊）を著わした伊藤鳳山が、続編に書きもらした項目を増補した未刊の稿本で、従来は稀覯本であった。しかし一九八六年六月に右の三編を収録し、湯浅幸孫氏の解題、戸川芳郎氏のあとがきを附した影印本が汲古書院から出版されたのでようやく入手し易くなった。

ところが続補には杏雨書屋に蔵されていた異本がある。筆者は湯浅本が出版される以前に杏雨本の複写を入手していたが、あらためて両者を比較すると、項目の選定とその数に異同があり、書写体や体裁にも明らかな異なりがある。本稿ではその異同を明らかにし、その執筆時期を検討する。

一

湯浅氏によると続補は「おそらく未定稿であったろう」と